

味の素食の文化センター研究成果概要報告書

<2019年度研究助成>

カリブ海の旧英国植民地、
モスキート海岸の食文化

国立民族学博物館 外来研究員・高木 仁

2022年6月30日

カリブ海の旧英国植民地、モスキート海岸の食文化

高木 仁

(国立民族学博物館外来研究員)

1. 緒言

列島の歴史が紡がれていくずっと以前から、古代人類は、その隅々で暮らしていたと考えられており、その外でもアフリカで最初の人類が誕生したおよそ 200 万年前から人類（旧人）が拡散を始め、その後、新人へと交代して地球上の各地で様々な文化・文明を築いてきた。人類学や地理学、霊長類学、考古学などの分野には、こういった途方もない時間や空間をめぐる学問があり、昨年度末に出版された学術書籍『食の文明論 ホモサピエンス史から探る（池谷和信編・農文協出版）』は、そういった諸分野で著名な学者たちが、霊長類から旧人・新人へと至り、現代社会に生きる私どもの食に至るまでの人類史（特にホモサピエンス史）をながく俯瞰して、人類の食行為という大きな謎を解き明かそうとする極めて冒険的な試みであった（池谷編 2021）。

編者の池谷によれば、人類の食行為を理解するうえで肝となるのが、野生の木の実を採集し、動物を狩猟していた狩猟採集の時代から、山を開き、田んぼに稲を植え、家畜を飼育して暮らすようになった農耕牧畜の時代への革命的な移行であり、それが地球規模で拡大していったという大枠での人類の自然に対する生産体系の変化であった。『食の文明論』の第 I 部では、私たち人類の食行為を理解するうえで、この革命的な食材獲得行為の移行がいかに人類の食行為を理解するうえで重要であるか、具体的な事例を持って人類による食資源の開発の変遷史（狩猟採集→農耕牧畜）が描かれ、それに都市型の食を追加することで近代文明の食行為への接近が始まる（第 I 部）。

『食の文明論』は全 3 部構成になっていて、第 II 部は人類の驚くべき食に対する適応力が提示される。第 II 部の 5 章によれば過去、人類の食に対する触手は昆虫やクラゲ、イソギンチャクなどの刺胞動物、菌類、カエル・蠅・ゴキブリ、土、微生物にまで及んだ。これは確かに多くの読者に驚きの事実として映る。調理や料理、キッチンに

についても同様である。農耕牧畜の時代が訪れた世界の各地では、およそ想像もつかないような食の風景や空間が開発され、それが文化として形作られてきた。環境や文化が変われば、貯蔵方法だって、下準備だって、食材の加工の方法だって、皿の洗い方だって変化するのであり（第 II 部の 7 章）、数万年の時間軸を用いるとその変化はさらに著しいものとなるという仮説を真だとするならば、確かに他の動植物の摂食行為と比べても、人類の食は遜色のなき驚愕の特性を備えているといっても差し支えない。編者らの提示するホモサピエンス史を同じようにながく俯瞰してみると確かに人類の食行為は我々、「文明」を生きるものにとって驚くほど興味深い視点を提示してくれる（第 II 部）。

『食の文明論』の第 III 部は、第 I 部・II 部で提示された人類の発展史と連動させるようにして、肉食の拡大や栄養適用など食行為を分析したものである。ここで注目されるのは、霊長類における食物摂取の革命的な変化と脳サイズとの相関性についての研究や、インスタント食品のような食材の大量生産・大量の廃棄、また、孤食のような近代化がもたらす食卓の問題など多岐に渡っているが、民族考古学や人類生態学、料理学、霊長類学など異なる専門性を有する方々が、台湾やニューギニアの原住民、霊長類のゴリラなど、それぞれ研究対象を用いてホモサピエンスや人類史の道程を辿って「文明」との結びつきを探ることで大胆な文明の食に至る発展論が出来上がっていく（第 III 部）。

総括では、人類の食の将来予測として、近未来の文明社会の食行為についても言及されているが、そこで述べられているように、確かにこれほどの長い時間と、特殊な空間のなかで農耕牧畜の時代へと続く人類史・ホモサピエンス史の延長としての文明社会の食行為が形作られてきたのであれば、近未来の食卓が抱える問題を考える上でも多くの示唆を与えてくれるという指摘には同意するところが多い。編者らが指摘するように、もし、人類が歴史の大半を狩猟採集といった生産体系によって

過ごし、その点への注目をより強める必要があるならば、農耕牧畜革命による生産体系の劇的な変化や、産業革命以後の世界で起こっている食料生産技術の革新の解釈もまたちがった見方となるに違いないだろう。そう考えた時に、『食の文明論』が提示する「ホモサピエンス史」を俯瞰的に研究した際に映る人類の食行為の驚愕さや驚嘆さが、「文明」に属する人々にはおよそ想像もつかないような代物であることに疑いはない。

本書の大枠は「サピエンス史」であり、「人類の進化史」や社会進化論をテーマにした研究群の総体的表象として受け入れやすい。これは編者や執筆者の顔ぶれを見てもさほど異論を唱える者はいないように思えるが、サピエンス史から食の文明を探った結果、どのような結論が得られたのか。

編者の池谷は総括の章にて、5段階（1. 調理・料理の誕生→2. 栽培化・家畜化→3. 階層化→産業化→グローバル化）を経て人類が変遷していくなかで近代文明が形成し、その中で食文化も形をなしたと主張している。だから編者らの視点は「食の文明」≒「人類の発展史の延長線上にある現象」である。本稿もこの点について議論したい。

2. 目的

本稿は以上のような緒言背景より、助成研究「カリブ海の旧英国植民地、モスキート海岸の食文化」について、文明論的視座へと接近するように分析した結果について報告して、食文化研究へと寄与することが目的である。

3. 方法

研究方法は、主に現地にて収集した一次資料と



図1. 西インド諸島・英領ケイマン諸島・モスキート海岸（南上）



写真1. カリブ海・英国領ケイマン諸島

学術文献資料を用いた研究である。その両歯車をあわせて、助成研究「カリブ海の旧英国植民地、モスキート海岸の食文化」を研究し、文明論的視座へと接近できるような論述を展開する方法をとった。

4. 結果

4-1. 文明の遺産として

現地調査に入ってきた中央アメリカ地峡の右岸に位置しているモスキート海岸（現ニカラグア・ホンジュラス海岸線）はその発見当初の野蛮な印象がながらく学術世界でも支持されてきた。現在でも新大陸に存在していた粗野で未開な原住民の暮らす土地だという見解が一部、支持されているが、おそらくその見解は近隣の島々や当地へと直接植民してきた文明社会や旧大陸の住民たちの影響力を過少に評価した結果が反映されてしまったためであろうと考えている。多少、奇抜に聞こえるかもしれないが、この誰も訪れないような遠隔の地にも文明的な世界は広がっている。

現代のモスキート海岸（現ニカラグア・ホンジュラス海岸線）を理解するためには、どうしても近現代の西欧史を遡らなければならない（図1）。

近現代の西欧史の中で偶発的に発見されたこのモスキート海岸と呼ばれる土地について、西欧人たちは、その北にある新大陸の古代文明と比較して、酷く遅れた土地と言う印象を持ったという記録が残っている。

新大陸発見当初、その新たな土地の植民にあたって重視されていたのが、古代文明が栄え、その富を享受し

ていた資源豊かな土地であった。そこには、新大陸の探検と言う巨額の投機の見返りとして約束されていた金や銀といった高価値の天然資源が存在していた。裸の原住民らが暮らし、酷く遅れた様相を呈していたモスキート海岸のような見返りの少ない土地へとさほど注意が注がれなかったのはさほど不思議ではなかった。

近現代の西欧史がこの土地へと注目し始めたのは、初期植民者たちの征服地の隙となる空間を提供してくれるが故であった。モスキート海岸のような見返りの少ない辺鄙な土地には、初期植民者たちの隙を虎視眈々と狙う海賊たちが集まっていたのである。この海域一帯に広がる湿地・マングローブ林は、海賊に格好の隠れ家を提供した。

地球を西回りに巡って、モスキート海岸（現ニカラグア・ホンジュラス海岸線）の東に広がる海域を北上するように移動すると、西インド諸島が広がっているが、近現代の西欧史を中心にしてみると、この西インド諸島の円弧のその少し先へと航海すると当時、フロンティアとなっていたモスキート海岸へと辿りつく。

湿地帯に属するモスキート海岸（現ニカラグア・ホンジュラス海岸線）は、近現代の西欧人にとっては極めて劣悪な環境であった。近隣の現パナマ北部海岸でも、仏から労働者として移住してきた者たちの多くがその劣悪な環境故に命を落とした。強烈な陽射しや密林、ジメジメとした湿地はこの地で幅を利かせている害虫たちに恰好の住処を提供する。このような環境で、近現代の西欧人たちはアフリカ人奴隷と共に西インド諸島、そしてその奥にあるフロンティアへと歩を進めていった。

フロンティアの開拓が進むなかで、西インド諸島の先にあるモスキート海岸（現ニカラグア・ホンジュラス海岸線）には、植民者との戦いで戦犯となった東カリブ海（リーワード諸島やウインドワード諸島）に暮らしていた原住民やガリフナ（Garifuna people、ブラックカリブ族としても知られる）族が送り込まれていった。また、モスキート海岸（現ニカラグア・ホンジュラス海岸線）では、アフリカ系の住民と原住民の混血として誕生し、在地の旧勢力のスム諸族（Panamika, Ulwa, Tawahka などの原住民族）を駆逐するようにして急拡大していた新興勢力のモスキート族（Mosquito）が、近現代の西欧列強と手を結んで頭角をあらわしていた。

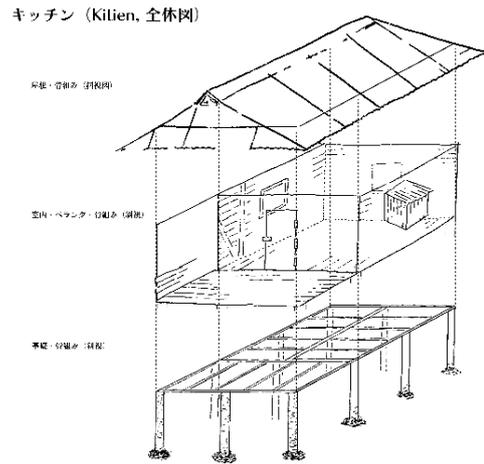


図2. モスキート海岸の西洋式キッチン

このモスキート海岸（現ニカラグア・ホンジュラス海岸線）では、海を渡ってきた近現代の西欧人植民者や海賊たちが、特に欲していた優秀な船材や安価な戦闘力、航海中の重要なタンパク源を提供してくる海亀などの海産物を豊富に手に入れることができる場所でもあった。近現代の西欧人たちは、近代的な測量をおこなって、その空間的特性を把握するだけでなく、監理官を置いてその統制を図るなど、その資源の管理統制に力が注がれていった。

英領ケイマン諸島（写真1）に近いこの地では西欧諸国の保護領としてモスキート王国（Mosquito Kingdom）が設置された。その王には英国王室から戴冠がおこなわれ、現代のモスキート海岸にもその文明の軌跡を確認することが出来る。

英国海軍が測量したモスキート諸島に残る地名にはロンドン・リーフ（London Reef）やダイヤモンド・キー（Die man's Ki, デッドマンズ・キー）などがあり、現地語でその名称を聞くと、あたかも原住民らの言葉のように聞こえるのは不思議だが、近現代に西欧を中心として派生していた文明の足跡が残ると考えて差し支えないだろう。それほどまでに文明の影響力は強大であった。だから、カリブ海のモスキート海岸で確認される海産物の食文化はこうした近現代に隆盛した西欧を中心とした文明圏の拡散の遺産と言っても過言ではない。

4-2. 辺鄙な土地の食卓文明論

図2は、この地で採集した台所の模式図である。現地で屋根部・建屋中央部分・基礎部分の三段階に分けて収集した物を一つの図としてまとめたものである。物質的には粗野で簡素な物であり、構

造的にもさほど複雑なものではないのだろうが、細部へのこだわりは随所に見られる。

収集した台所図は、この辺りでは最上級の代物でもある。建屋中央部分にある調理道具一式も収集してある。なかには機械式オーブンなどもあるが、オーブン部分は一切使用した形跡はなく、開けるとゴキブリの住処となっていて、天井のトタン板からは雨漏りがするし、板張りで一見すると粗末な建屋であるが、現地人からすれば、これは列記とした英国式（又は最新式）の台所（キッチン、Kitchen）なのである。伝統的な窯とは全く異なる代物である。鉄鍋のかけてある壁も西欧の英国式を容易に想起させてくれるし、キッチンの隣にあるバナナの畑や伸び盛りの雑草地帯もそれは同様で、一見すると、ただの庭に映るが、立派な庭園（ガーデン、Garden, 現地ではギャーデンと発音する）なのである。その果樹や椰子の木のメンテナンスには対価が支払われるし、芝刈りもほぼ同じ高さで切りそろえられるなどのこだわりがある。山刀を振りまわすような草の刈り方が多少、野蛮っぽく見えるだけの話である。

4-3. 野蛮なる食行為に対する忌避

興味深いことに、モスキート海岸（現ニカラグア・ホンジュラス海岸線）に暮らす人々が、野生的なものを殊更に嫌う傾向にあったことである。

現在の住人たちは、かつてのアニミズムや多神教・精霊信仰と異なるキリスト教・一神教的な世界観や教義の中で暮らしている（写真2, 3, 4）。伝統的な神話や教義も勿論、日常の中で散見することは出来るが、生活上の美德や道徳の教義として依拠するのは聖書になっている。聖書の教義は古来の実践と競合してしまう事すらある。

次頁の図3は、この地で伝統的に用いられていた旧暦と、近年になって確認されるようになっていく新暦の表現について比較したものである。旧暦も12ヶ月分類になっており、近代化の影響が既にみられているものの、そのサイクルに自然の変遷（気候の変化や動物の旬となる季節）を用いている点で特徴的な暦と言える（※20カ月に相当する暦があったと言う噂を現地で聞いたが、その情報の出典は今のところ確認できていない）。一方、新暦の方はローマ時代に整備された12カ月の現代のグレゴリオ暦である。詳しく対比してみると、その特徴が如何に異なるかよく理解できる。



写真2. キリスト教神父の誕生日の食卓



写真3. 聖書劇（「王の帰還, King Plaka」の楽隊）



写真4. 結婚式後の晩餐会での一幕

旧暦は自給自足や、狩猟採集的な生活が色濃く残る時代の名残だと考えられるが、こうした旧暦には乾季に、旬として表現される動物（卵の季節）が存在する。しかし、現在の教義においてそれらは不浄とされる食材に相当する。聖書には腹ばいで移動する動物（爬虫類・両生類）の摂取を固く禁じているとの記載があり、こうした動物たちの摂取は野蛮なる食行為として忌避される。それを正当化するための理屈作りもまた、彼らの日常的な関心ごとであった。

現地学術調査に入って、度々、尋ねられたこと

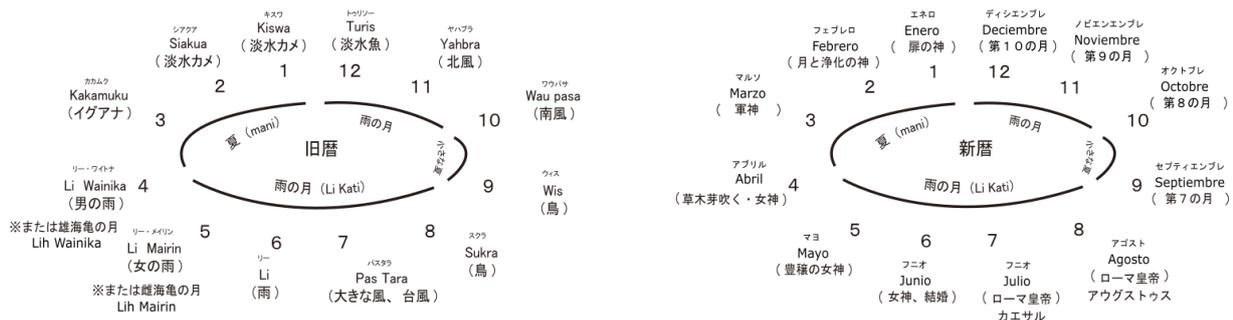


図 3. モスキート海岸の旧暦と導入された新暦（グレゴリオ暦）

が「蛙」を食するかどうかであった。彼らは蛙食を酷く嫌う。この地に蛙の神話は多く残るから、馴染みがあるはずであるが、蛙を極端に嫌っていた。彼らが汚いと蔑視している蛙だが、文明社会では食用にすら出来るし、鴨やカタツムリにも美食を見出すことが出来る。彼らが「冷たい」と称する魚類（鰈などの身がふわふわとしている魚を指す）も何の抵抗がなく食することが可能である。そのように「文明社会」に属する彼らは、遠隔の地から来た得体のしれない人間の「野蛮性」に大変な興味を持っている。

5. 考察

モスキート海岸（現ニカラグア・ホンジュラス海岸線）を辺鄙な土地の代表例として考えてみたい。強い影響力を持った文明的な食文化の拡散によって特殊かつ簡素で粗野で、「野蛮なる食行為」というものは、文明的な食行為の内に潜在する形へと変貌した。

確かに『食の文明論』が提示するホモサピエンス史をながく俯瞰してみた時に映る人類の食行為の野蛮さは、文明社会に属する人々には驚異的に映るが、モスキート海岸ではその境界線はさほど明確なものではないように思える。文明の食行為は反転させることで酷く野蛮にも映る。

文明における食行為の怪奇性や、巨大フード産業が見せる物質文化的な特性、食を巡る世界的な流通経済網の特殊性をどのようにして分析していくかについては、まだまだ議論の余地があると感じる。文明の哲学的解釈や人類史、世界の食物史研究における位置づけを考慮すると、更なる研究の余地も生まれるに違いない（石毛監訳 2005, スミソニアン協会・木村凌二監修 1998, 廣松・子安・三島・宮本・佐々木・野家・末木編 1998）。

極めて挑戦的な試みであった『食の文明論』

モ・サピエンス史から探る（池谷和信編・農文協出版）』は、その大枠にサピエンス史を用い、その基底に詳細な人類の進化史の研究を用いている点で極めて特徴的かつ優れた食文化研究であるが、筆者は副題にあるサピエンス史を用いた場合、問題を「文明の食」⇨「人類の発展史の延長線上にある現象」ではなく、⇨「野蛮人の食に潜在する現象」としてみる。

編者の池谷が別々所で度々、指摘しているように①人類史の 99%がそのような野蛮な状態であり、②そうした狩猟採集時代によって地球環境の持続性が何百万年も守られたのだとしたら、豊かな食材を育む空間に対して、賢く「文明的」な振舞いしてきたのはむしろ野蛮人になる。サピエンス史を用いて食の文明論を探るのであれば、我々を「文明人」と呼ぶこと自体が間違いである可能性すら追わなければならないのではないだろうか？ 我々は野蛮であり得る。

本助成研究「カリブ海の旧英国植民地、モスキート海岸の食文化」は、昨年度、提出された『食の文明論』に対して、そのような疑問を想起させてくれる食文化研究として学術的な有為性を示す。

6. 参考文献

池谷和信編（2021）『食の文明論 ホモ・サピエンス史から探る』農文協。
 石毛直道監訳（2005）『ケンブリッジ 世界の食物史大百科事典 1』朝倉書店。
 スミソニアン協会・木村凌二監修（1998）『ビジュアルマップ大図鑑 世界史』東京書籍。
 廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末木文美士編（1998）『哲学・思想事典』岩波書店。